# 桐一葉

「週末寸言」原稿　20081101

窓辺に一本、桐の古木が立っている。樹齢６０有余年の堂々たる大木で、雨を含んだ初夏の候には紫色のきれいな花をいっぱいつけ、辺り一面に芳香をふりまいていた。真っ先に秋を感ずる桐の木は、今年も残暑の頃から一枚また一枚としづごころ無くその大きな葉を落としてきた。めっきり寒くなった今朝樹上を見れば、最後の一枚が危なっかしく風に揺れていた。

「一葉落ちて天下の秋を知る」（「淮南子」）。この最後の桐の葉、解散風に揺れる衆議院議員たちの心境を想起させる。そういえば、日本国内閣総理大臣の紋章は五七の桐。来春、桐の新葉が開く頃、この紋章に名を添えるのは一体誰だろう。

衆院解散時、議員たちは万歳を「元気よく」絶叫する慣わしだが、もはや二度とこの赤絨毯を踏むことの無い少なからざる人々がいるはずだ。代議士経験のある知人から聞いた話だが、あの万歳、「元気よく」ではなくて「やけくそ」に叫んでいるだけで、興奮と緊張で身内には冷たい汗が噴き出しているのだそうだ。この時ばかりは「天下の秋」を下着の下にじっとりと感じ取っていたというわけだ。

桐一葉からでも札束を作り出す化け狐よろしく、金融工学という錬金術を駆使して、次々と投機商品を開発してきた世界一の証券印刷工場アメリカから、案の定、大不況がやってきた。東京証券取引所の株価は、半年前の半分に下落。金券に化けていたドル建て債権は、虫食いの桐の葉となって一敗地にまみれた。

そうでなくても、派遣労働だ、非正規雇用だと、不安定な生活を強いられている人々が１６７７万人（０６年総務省統計）。その彼ら彼女らの多くは、迫りくる不況の中で解雇や配転のリストラにさぞやおびえていることだろう。

「よるべをいつ一葉に虫の旅寝して」（芭蕉）。桐の一葉に虫が一匹。頼りの葉が秋風に振り落とされて一緒に水に落ちた。この虫はいつの日、生きて岸辺に上がれるやら。江戸のウォール街日本橋を脱出して、フリーターよろしく僻地深川に隠棲した芭蕉翁不安の一句だ。人は今も、延宝年間同様に愚かなままに蠢いている。